

共通論題
国際金融市場の変貌とアジア経済
概要

広島大学 小松正昭

1980年代半ば以降、東・東南アジア諸国（以下東アジア諸国）は急速に国際金融市場に組み込まれてきた。それに伴い、国際金融市場の変動は東アジア諸国の資本移動および国際収支構造に影響を与え、さらには国内金融部門や実体経済に大きな影響を与えている。その最も深刻な例が、1997年に発生したアジア金融危機である。今回の共通論題のテーマは、東アジア諸国の資本移動と国際収支がどのように変化しつつあるのかを踏まえ、それが国内金融部門にもたらす問題点を検討した上で、国内金融部門の今後の課題を明らかにすることである。

パネルディスカッションの第1の論点は、マクロベースでの東アジア諸国の資本移動と国際収支構造の変化を分析し、その経済への影響を検討することである。アジア危機以降、東アジア諸国は経常収支を大幅黒字化させ、外貨準備の積み増しを進めている。サブプライムローン問題以降減速しつつある世界経済のもとでも、このような国際収支構造は継続するのであろうか。またそれは東アジア諸国経済にどのような影響を与えるのか。第2の論点は、マクロベースの国際収支構造と表裏をなすミクロ産業ベースでの資金調達構造を検討することである。マクロベースでは、金融危機以前には対外資金依存が急速に増大しているのに対して、ミクロ産業ベースでは、危機以前も以後も共に企業の外部資金依存度は増大していない。このギャップをどのように理解すべきなのか。それはアジア金融危機の原因と関わり合いがあるのだろうか。そして今後の経済発展を支える投資構造にどのような意味を持つのだろうか。第3の論点は、産業発展のための投資資金を、国内金融部門によっていかに効率的にファイナンスするかを検討することである。それが達成されれば、アジア金融危機の引き金となった海外資金依存による為替と期間のミスマッチは改善される。ここでは、東アジア地域における債券市場育成の取り組みとそれに対する日本政府の支援策を紹介し、その成果と制約要因を検討する。さらに、サブプライム問題などの国際金融市場の変化がアジア債券市場の発展にどのように影響を与えるのかも併せて検討したい。最後の論点は、金融部門の安定と発展を達成するための金融システム上の課題を検討することである。特に国際金融市場への包摂と国内金融市場の自由化が進む中では、外国資本・外国投資家要因とその役割を金融システムにいかに組み込むのか、また市場型金融へいかにスムーズにシフトするのかといった課題が重要となる。

以上の論点を踏まえ、今後の東アジア諸国の国際収支構造と金融部門の課題を議論する予定である。